

## 新型コロナウイルスと対人距離

教育委員 橋本 和明

新型コロナウイルスが猛威を振るい、緊急事態宣言が出されて皆さんは多大なご苦勞をされたことと思います。大人でさえ、「コロナ疲れ」「コロナストレス」になったのですから、保育園や幼稚園、学校に行けず家にいなければならなかった子どもたちはなおさらしんどかったと思います。現在は緊急事態宣言も解除になり、登園・登校も始まるようになりましたが、まだまだ気を許せません。

さて、そんな新型コロナウイルスの感染防止で叫ばれたのが密閉、密集、密接という「三密」です。まさにこれは対人関係のあり方そのものと言ってもいいかもしれません。従前であれば、相手と親密になれば自然に距離が近くなったり、仲良しの者だけの空間や時間を共有していたと思います。しかし、どうもそれが今までのようにはいきません。人との距離をしっかりと取らなければ感染のリスクが高まるからです。

心理学者のホール、E.T.という人はパーソナルスペースという概念を提唱しました。それによると、人間は密接距離（親子や恋人のように親密になった人だけしか入れない距離）が0cm～45cm、個体距離（手を伸ばせばふれあうことができ、親密になればそこに入ることを許される距離）が45cm～120cm、社会距離（ふれあうことはできないが、容易に会話ができる距離）が120cm～350cm、公衆距離（個人のつながりが無い知らない人との距離）が350cm以上と4つの距離を対人関係の中で使い分けています。それを借りてくると、新型コロナウイルスの感染防止の距離は100cm～200cmというわけですから、ホールの言うところの社会距離に相当するわけです。つまり、親密になりたいけれども親密になれないジレンマが生まれるのです。

このあたりがこれからの対人関係における難しい課題になってきます。本来なら人と親密になればなるほど距離が縮まるものですが、それが今はうまくいかないわけです。また、距離が近づき過ぎたりふれたりすると、ウイルスが感染してしまう不安が生じます。逆に、知らぬ間に相手に感染させてしまう不安も伴い、なかなか人との距離感が取りにくくなってしまいかもしれません。

しかし、ネガティブなことばかりではありません。今回の新型コロナウイルスの感染防止の活動があったことで、これまでにない対人関係のあり方をいろいろ発見したのではないのでしょうか。例えば、オンラインを通じて授業をしたり会議をする、さまざまなアプリを使って情報交換をしたり発信をする、オンラインで飲み会までもできてしまうのです。人との接し方はいろいろ方法があるんだということ、適切な距離が取れていることは安心安全感を生むのだということを再確認しました。これが身につくと、相手の圏内に土足で入ることもなくなるでしょうし、相手から傷付けられたり、逆に相手から傷付けたりすることも少なくなるでしょう。世の中にあるいじめや虐待、ハラスメントなども、相手との距離が不適切であることからしばしば生じますが、そうならないための対人距離を新型コロナウイルスから改めて教えてもらったように思います。

最後に、今後は新型コロナウイルスが収束し、ワクチンも開発され、より安心安全な社会が一刻も早く戻ってくることを祈るばかりです。